

『旧世界史 A』，『旧世界史 B』

問題作成部会の見解

『旧世界史 A』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問は，「権威や正統性を示すために制作，展示公開された図像や銅像」を素材とし，モノとしての「政治体制のイメージ（像）」の歴史的役割について考えさせる問題である。Aでは，デューラー作「カール大帝」と，その作品を制作させ展示した都市ニュルンベルクを題材に，神聖ローマ帝国からナチス=ドイツに至るまでの歴史的関連性についての理解を問うとともに，資料から必要な情報を読み取る力を問うた。Bでは，ブカレストにあった銅像を素材として，会話文や資料から読み取った内容と近現代ヨーロッパの出来事の知識とを関連付けて考察する力を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第2問は，近代以降の諸地域に見られた国内政治の変容や推移を複数の事例から問う問題である。Aでは，ソ連の歴史及び世界史上の民族運動に関連する出来事を素材とし，リード文からソ連の連邦制の特徴を読み取るとともに，現在も続く民族対立や紛争の背景を理解する力を問うた。Bでは，19世紀から20世紀にかけてイギリスで行われた国政選挙における主な政党（保守党，自由党，労働党）の政党別得票率の推移を示したグラフを素材とし，学習知識とグラフの読み取り内容とを関連付けて考察する力を問うた。Cでは，19世紀後半のエジプトの対外借入のグラフを素材とし，他の非西欧世界を視野に入れつつ，エジプトの近代化について，学習知識とグラフの読み取り内容とを関連付けて考察する力を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第3問は，世界史上に見られた，政治や社会における女性の地位や立場の，時代や地域によって見られる違いについて解答させる問題である。Aでは，フランスの王位継承における女性と女系男子排除の歴史を取り上げ，中世から近代における世界史上の出来事について，世界史的な知識とリード文から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。Bでは，冷戦期のアメリカ合衆国の女性史について，米ソの指導者による対話と女性運動家の書物を素材に，世界史で学んできた知識と，資料を読み取った内容を関連付けて考察する力を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第4問は，世界史上に見られる民族に関わる諸問題とその歴史的な重要性を考えさせる問題である。Aでは，カフカスの歴史的展開を，民族問題を軸として問う設問であり，冷戦末期以来，民族紛争が継続するこの地域の状況を，歴史的視点から考察する力を問うた。Bでは，1910年にオーストリアで

行われた国勢調査から言語の地域分布を示し、それを基に、言語やナショナリズムの問題が、戦間期の政治にどのような影響を受けたのかを考察する力を問うた。Cでは、前近代から現代に至る中国の政治的変容と、それに伴う東トルキスタン地域における少数民族の状況変化との関連を問う設問であり、現代中国の新疆における民族問題の背景を、政体の変化や人口動態、経済発展の状況と結び付けて考察する力を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

3 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と自己評価を述べてきた。最後となった『旧世界史A』についての見解を述べておきたい。分量については、受験者が余裕をもって時間内に解答できる適切なものであり、難易度についても、適切であった。

時代的には、中世、近世からの問題を含め、『旧世界史A』の特性である近現代に重点を置いて出題しており、教科の特性から考えると、妥当なバランスであったといえる。

本部会では、共通テストの趣旨に基づいて、リード文や資料を見ずに設問文だけで正答が導き出せるような出題形式から脱却することを目指してきた。本年度は地図・絵画・グラフなどの様々な資料を活用して、事実的知識にとどまらず、ネーションやジェンダーなどの概念的理解をも求める問題となるように心掛けた。

『旧世界史A』の作問は今年度が最後となる。学習指導要領・教科書のテーマに即した作問に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる設問を考案できたと考える。

『旧世界史 B』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問は，「世界史上の文化や，その交流を現代に伝える文物」をテーマとし，Aでは，アケメネス朝ペルシアとアテネの図像資料を素材とし，アケメネス朝ペルシアの広がりや影響や，学生と教授の会話で示した仮説を世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。Bでは，中国の後漢時代および唐代，また日本の平安時代の各種著作を取り上げ，日中の文字文化・書道文化について，リード文の読み取りを基に，内容的理解とともに概念的理解を問うた。Cでは，ベニン王国の工芸品を素材として，16世紀以前の西アフリカ諸王国の状況と，19世紀以降のイギリスの植民地支配を支えた思想的背景について，内容的理解とともに概念的理解を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第2問は，「言語やジェンダーなど様々な領域に反映された支配と従属の関係」をテーマとした。Aでは，小説『アイヴァンホー』の支配者と被支配者の言語の違いを述べている一節を素材に，中世から近代におけるイギリスの歴史について，世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。Bでは，1844年にイギリスで女性工場労働者の労働時間を制限する法案を支持した議員による演説資料を基に，世界史上の女性をめぐる状況や労働者の運動について，世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。問1の正答率が若干高いが，全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第3問は，「帝国の制度や政策」をテーマとし，Aでは，『後漢書』宦者列伝を素材とし，中国史上における宦官と関わる出来事及び皇帝権力の強化・集中に関わる政策について，世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。Bでは，19世紀イギリスの国際収支を示したグラフを基に，学生と教授の議論内容と，本文や資料から適切に情報を読み取り，世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。Cでは，15世紀から20世紀にかけてのロシアとソ連の領土と人口の変遷に関する統計表を基に，歴史的事象の時系列・推移の性質等の変容を世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。連動問題（問8）も含め，全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第4問は，「世界史上に見られた植民地と宗主国との関係」をテーマとし，帝国主義におけるフランスの植民地政策，インドの「塩の行進」を題材とした。Aでは，近代フランスにおける植民地政策に関する絵画と地図を素材として，世界史上に見られた植民地と宗主国との関係について，リード文から読み取った内容と，世界史で学んできた知識と関連付けて考察する力を問うた。Bでは，インド民族運動の画期でもあった，ガンディー発案の「塩の行進」をテーマに，その歴史的意義について，学生と教授の会話内容と，世界史で学んできた知識とを関連させて考察する力を問うた。

全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

第5問は、近現代において、世界の中で大きな影響力を有してきたアメリカ合衆国をテーマとした。Aでは、アメリカ合衆国の国歌を素材としつつ、19世紀から20世紀にかけてのアメリカ合衆国の歴史について、世界史で学んできた知識を関連させて考察する力を問うた。Bでは、キューバ危機におけるアメリカ合衆国とソ連の外交交渉の内容を素材として、史料の公開が与えた歴史的評価の変化を読み取り、世界史で学んできた知識を関連付けて考察する力を問うた。全体として正答率・識別力の点で妥当であったと考えられる。

3 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と自己評価を述べてきた。最後となった『旧世界史B』についての見解を述べておきたい。

分量については、受験者の負担軽減を第一に考え、今年度も文章のスリム化を心掛けた。出題のバランスについては、地域・分野・時代においてバランスをとるべく留意した。それぞれにおいて、昨年度と比較すると、より適切であったかと思われる。

本年度の作問でも、引き続き複数選択肢連動型問題の出題に挑戦した。これまでの共通テストにおいては、写真・地図・文章資料・グラフなどの多様な歴史資料を提示しつつ、そうした諸資料の読解に基づく考察や内容の理解に立脚した包括的知識を問おうとする作問に努めてきた。また、高校の歴史の授業を通じて身につけた「探究のサイクル」についての習熟度を考査すべく、仮設の妥当性を論理整合的に検証させる問題の作成にも取り組んできた。

『旧世界史B』の作問は、今年度が最後となる。指導要領・教科書のテーマに即した作問に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる問題を作成できたと考える。また、資料やリード文から読み取れる情報を基にして、既習内容から得られた包括的・概念的 understanding を踏まえつつ、論理的に考察し構想することで正答にたどり着く問題を考案できたと評価したい。